

# 木材の価値を、魅力を知ろう そして創造しよう

木曾官材市売協同組合 副理事長兼専務理事 原田 浩幸

## 1. はじめに

長野県の木曾郡といえば、日本三大美林である天然秋田杉、天然青森ヒバと並ぶ天然木曾ヒノキの産地であります。

文豪、島崎藤村の小説「夜明け前」の冒頭に記されています「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。」とあるように、木曾地域は、独立3,000m峰の木曾御嶽山を始めとした幾重もの急峻な山に囲まれる地にあり木曾谷と呼ばれています。

この森林資源に恵まれた木曾の地を拠点として木曾官材市売協同組合は木材の流通の一翼を担いさせていただいています。

この度、東北森林管理局において、高品質ブランド材規格の新たな制定がなされ、高齢級国有林高品質材の供給に動き出している中での講演依頼がありましたので、私の木に対する思いをお話しさせていただきまして、木材の価値に対する好奇心を持っていただき、その後、探求心へと深め、自信に繋げ「木材の魅力・持ち味」と「木は面白い」の想いを共有し、国産材の理解者の拡大に繋がる話になればと思います。

## 2. 携わる人が木材の価値、魅力を理解することが重要

樹木は、長い年月厳しい気象条件と立地条件に左右され、さらには風害、落雷等による傷害も多く、特に冬期における雪害、凍害に大きな影響を受けながら成長を続けています。木材の販売にあたっては、こうした成長の経過を認識し、木材を商品として取り扱う必要があります。

ブランド材の販路開拓、需要拡大と取り組む中で、携わる方々には、木に対して興味を持っていただかなければ何も始まりません。

### ○木材の成長過程を知る

年輪と外見からその木の成長過程が見てとれます。木口（切り口）の年輪や材面には、その木が育ってきた過程が刻まれています。ストレスなく育った木と、多少もしくは相当のストレスの中、育った木では大きな違いが見られます。木材の木口にはそれぞれの木の成長段階での環境が刻まれています。稚樹、幼樹の時期に相当な密林状態で光合成や栄養を吸収することができず年輪幅が緻密であったり、枝打ちがほどこされたことから成長がスピードダウンして、年輪幅が細くなったということも確認ができたりします。平らな場所ですくすく育つ木ばかりではありません。なだらかな場所、急峻な所、東西南北のどの方向なのかでは成長環境が違います。中には過酷な環境下で成長している木も多いわけです。

## ○木の姿とその成長過程を知る

写真1は、急峻な場所で育った立木です。

谷川に倒れないように踏ん張ったのですね。例えば、人間が休めの姿勢で足を変えずに3時間同じ姿勢のまま立っていたとします。そうしますと、突っ張っている足の筋肉はどのようなのでしょうか。

当然ながら筋肉は、凝り固まります。

立木も同じです。谷川に倒れないよう踏ん張ったため木質が固くなっています。

このような木材は製材すると力の放出が現れます。割れたり、曲がったりします。大きな力を蓄えたものには、製材機のノコ歯との摩擦から煙を出しながら製材機の歯を止めてしまうものもあります。

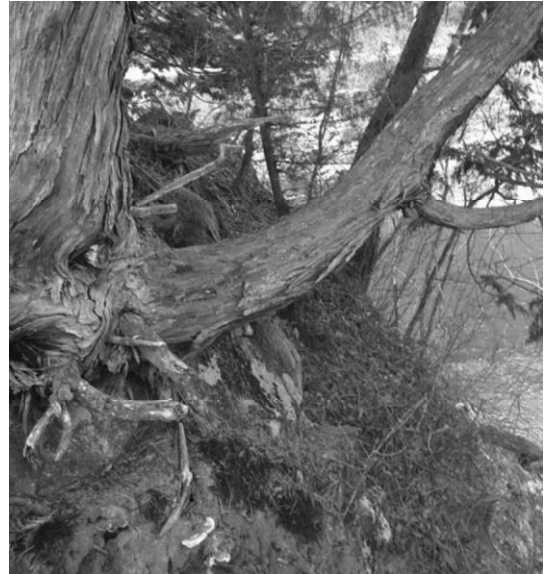


写真1 踏ん張った木

写真2は、ねじれが生じたものです。まるで雑巾をギュと絞った様に見えます。この原因は、立地条件、日照条件などによるといわれています。

左ねじれは、北向き斜面の東寄りに立っている立木が、東から登る太陽に向くということから左にねじれます。

また、南向き斜面の立木は真逆の右ねじれになります。全ての立木がねじれる事では、ありませんが、ヒマワリの花が太陽の方向を向いて動く習性と同じなののでしょうか。



写真2 ねじれた木

不幸にも成長段階で、雷（カミナリ）に打たれてしまう立木があります。そうした立木は、雷の強さにもよりますが上方部分から裂けてしまうものや、燃えてしまうものなど様々です。

雷を受け必死にその傷を癒そう癒そうと成長を続けた木も、雷は繊維を切り裂き、材面上にはケロイド状の傷がつきます。その隙間から雨水が浸透し、カステラ状の腐れが発生してしまいます。このような木材は製材用材としての価値は落ちる状態となってしまいます。

## ○木柄（木質）を理解する

人間社会では、よく人柄が良い・悪いと言いますが、原木にも木柄が良い・悪いという表現をします。その判断は、使用用途やその人の主観・感性によって変わります。外見と木口において、木柄の良し悪しを述べてみたいと思います。

例えば写真3のヒノキ原木2本を見て、好みの木を選んでいただくと大半の方が、Bが好みとお答えになります。

木柄の良し悪しの判断はその人の主観、感性で良いのです。

ですからAでもBでも良いのです。

その直感が“目利き力”の第一歩です。自分が良いと思う、その感性が大事です。

この2本の相違点をお話ししますと、Aは全体的に赤みを帯びています。ヤニ気があります。構造材向きです。Bは全体的に白さが目立ちます。白さが際立つ木は、神仏関係者に好まれます。木工向きです。私は、原木のこういった違いなどを見て使用・用途の判断予想から価格決定を行っています。

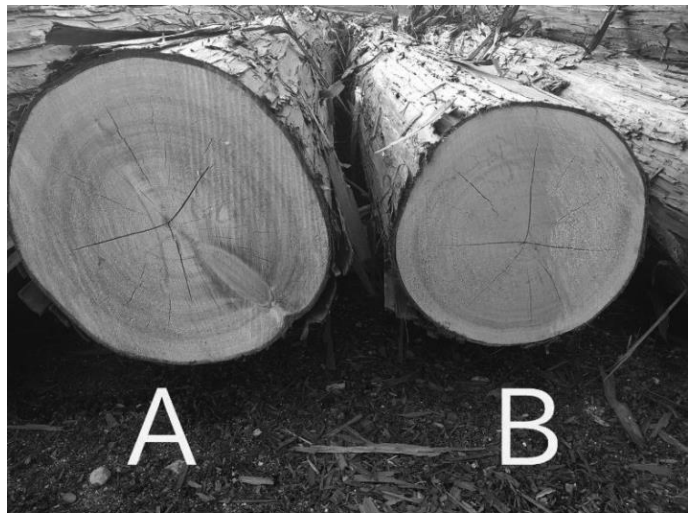


写真3 お好みの木はどちらですか？

## ○木材の使用・用途を知る

地元の中学校が全国相撲大会で「全国制覇」したときに、角界で行事を務めていました第26代木村庄之助さんから頂いた「自分の持ち味を生かせよ」の言葉があります。

私は、長いこと木に親しんでいるせいか、これらの木の姿をみて「欠点」というのが嫌なのです。「欠点」と見るのではなく「持ち味」としてとらえたら用途が広がるはずだからです。

お寺やお宮の本殿を正面から見て漢字の八の字に似せた屋根があります。写真4は破風板（からばた）というものです。曲がり材の原木をスライスしたものと推測しました。曲がりを生かしたことにより、大径材を加工して使用することなく大幅にコストダウンがはかれます。「曲がりなりに使う。」ということです。



写真4 秋田諏訪宮の破風板

S字曲がり（からばた）は屋根本体の軒先を丸みを帯びた形に造形した唐破風の破風板として生かされます。さらに、曲がり材は長い年月の間、力を溜めた木なので強度を必要とする屋根裏全体の要として猫の背中のように使用した張り材として利用されます。先人たちは、そういった木の「持ち味」を見抜いて使用していたと考えられます。

用材利用は厳しい雷に打たれた木材ですが、あえてその原木を購入された方がいました。様々な願い事を書き込む絵馬を制作するそうです。落雷を受けた木を「天からの授かりもの」としてご利益があると考えたのです。

制作した絵馬（写真5）は、縁起を担ぐ方々に好まれ、それなりに商売が成り立っているとの事です。年間を通して購入いただいています。

素晴らしい発想の転換だと思いました。



写真5 参考-伊勢神宮の絵馬

### 3. 中部森林管理局で始めた「〇高〇国木曾ひのき」のブランド化

この度の東北森林管理局では、あきたの極上品や〇天〇国青森ヒバなど6種類の高品質ブランド材に関する規格を新たに制定し、ブランド化されたことにつきまして、誠にありがとうございます。

今後は規格別の「持ち味」が十二分に活かされブランド化への意義を追求して行かれることと思います。

中部森林管理局で始めた「〇高〇国木曾ひのき」のブランド化は、今年で10年目を迎えました。思い返しますに希少資源の天然木曾ヒノキの代替材として高齢級人工林を位置づけ、天然木から人工林へのシフトチェンジを迫られる中でのことでした。しかし、その方針には様々な葛藤がありました。

200年以上成長した天然木の年輪の緻密性を人工林に託すということです。

あれから10年、今では135年生を筆頭に〇高〇国木曾ひのきは、木曾で生産されています。

その中には、天然木に負けず劣らずの高緻密な年輪が刻まれ、心強い成木に成長してきたものもあります。

若干、中部森林管理局監修のもと進めた木曾森林管理署ならびに木曾官材市売協同組合の〇高〇国木曾ひのきのブランド化へ向けた取組を紹介させていただきます。

平成25年、木曾の地に自生する樹齢80年生以上人工林ヒノキについては、天然木曾ヒノキに替わるものとして、「〇高〇国木曾ひのき」と呼称、ブランド化・差別化し販売をはじめました。〇高は、高齢級、〇国は、国有林を意味します。さらに、①長級4m以上かつ径級30cm以上の尺上材、②長級4m以上かつ径級24cm～28cmの中目材のうち、曲材、多節等の該当がない良材には極印を打刻することとしました。極印材は熟練者（農林規格の知識を持つもの）が権威をもって選定しています。選定者の「目利き力」がカギとなり、出荷場所番号付けがされていますので真剣です。

PR活動として数種類のカラーののぼり旗を取り入れました。その中でも木材の葉の色(緑)、樹皮の色(茶色)、下段には御嶽山の絵を取り入れたのぼり旗があります(写真6)。

この旗のポールは、○高○国木曾ひのきの芯の部分をごだわって使用して作成しています。

パンフレット作成や産地証明を原木に付すなどのPRやプレスリリースにより複数の新聞社に取り上げていただき掲載をいただきました。

このような結果、平均単価 30 千円/m<sup>3</sup>の人工林ヒノキにおいても、極印押印材の平均単価 105 千円/m<sup>3</sup>、最高価格は林齢 126 年生で 5 m材が 260 千円/m<sup>3</sup>になりました。

ただし、極印材となる確率は 1/170 程度の出現率です。

これからも当初取り組みを継続しつつPR活動を継続していきます。



写真6 PR活動としてのぼり旗

#### 4. 価値・魅力を知り創造する

さて、当社の独自の取り組みとして木材価値を知り、有利販売に繋がるキャリアを積み上げるため鑑定士制度の取り組みをはじめました。木材の価値は、生産現場での第一刀でその木の価値が決まります。そのため生産者サイドと販売サイドとの価値の共有が大事です。そこで①立木鑑定士、②採材鑑定士、③価格鑑定士の取得制度を設定しています。この3つの資格を取得するには大変な努力が必要です(写真7)。

私は、職員に対して優しく丁寧に、「楽しんで覚えてもらうよう」努力しています。

そう簡単には鑑定士の資格を職員に与えられません。偉そうに言う私も生涯勉強と思います。このことから職員に目利き力を養ってもらい市場人としての強みを共有したいです。

この構築により、森林所有者、素材生産者、需要者全てが、「あ〜売れて良かった」「買って良かった」「生産させてもらえて良かった」となることが最終目標です。



写真7 価格鑑定の研修会

## ○建造物以外の創造

さかのぼること5年前の平成30年、近年生活様式が変化から新たな木材需要開発のため、オフィスやアパート・マンションなどで利用できる「ブランド材を用いた新たな洋風パーテーションのデザインコンペ」を中部森林管理局は実施しました（写真8）。

また、令和元年度においては「ブランド材を用いた新空間デザインコンペ」と改め、

会議室や住宅玄関の壁面など、内装にも幅を広げデザインを募集してまいりました。

2回のコンペには老若男女問わず多数の参加者が募り、木材利用の感心の高さ、深さを感じ取れました。当社も創造から始まる国産材の需要拡大に繋がる企画を行いたいと考えます。



写真8 デザインコンペの表彰式

## 5. 地産地消の取り組み

ここ数年の間に木曽郡において町村庁舎の新設が3庁舎ありました。

令和3年4月に開庁した木曽町役場本庁舎・防災センター（写真9）は、「木曽にかける大屋根」をコンセプトにした木曽地域の伝統的な「出し梁造り」の工法を用いた、全長108メートルの長大な木造鋼板葺平屋建ての建物です。

木曽地域産の木材約1万2千本が使用され、ヒノキ材のほか、近年、建築用材としても需要が高まっているカラマツ材がふんだんに使用されており、柱や梁などの構造材は、町有林材が4割を占めています。

令和3年5月に開庁した<sup>あひまつ</sup>上松町役場新庁舎（写真10）は、木造と鉄筋コンクリート造との混構造で、主要構造部に「木曽産ひのき材」が活用されています。正面玄関を入ると、太い強い柱と細い材が枝分かれした上部架構により、森の中にいるような空間が出迎えます。

昭和25年に町の中心部を焼く大火があり、以来、都市計画法に基づき木造建築物には条件付きでの建設が決められていることから、木造部分は燃えしろ設計で現しを実現し（製材は日本農林規格（JAS）に適合した木材が必要）、4本の柱を合せた「合わせ柱」、2本、3本で合させた「合わせ梁」などが特徴的です。



写真9 木曽町役場庁舎



写真10 上松町役場庁舎

令和3年5月に開庁した大桑村庁舎（写真11）は上松町庁舎と同様、すべて木造ではないですが、内装には村有林材や村内の国有林材を使用しており、館内で見える部分のほぼすべてを大桑産の木材を使用しています。こだわりは、床がすべて大桑産のスギ床板です。

今後も予定されている公共施設、一般住宅など「地産地消」の理解を深めていただき、

「made in Japan is Kiso」の消費に期待するところです。



写真11 大桑村役場庁舎

## 6. 終わりに

写真12は、立木調査の際に遭遇したのですが、「石の上にも3年」とありますが、この立木は、石の上に80年です。推測ですが、立木の育ち始め根元まであった土が浸食され石の割れ目に根が張って成長する中で、根が石を割りながら成長しています。凄まじい生命力です。

このように長いスパンの中で行われる林業の生産活動は環境問題の要であると思います。ですから「環境業」でもあるといえるのではないのでしょうか。

その環境業に携わる方々は、山の恵みに感謝し、山の整理整頓することから、活力ある水を育むことに努めています。その原資となるよう私共は、木材の有利販売に徹しなければなりません。「石の上に育つ木」のように「継続は力なり」を胸に豊かな森林との共存を未来とともに繋げ継続していきましょう。



写真12 岩を割る木

木は寡黙です。人間と会話が成り立つわけではないのですが、木の「持ち味」を私たちが考えてあげることで、その木が育ってきた長い、長い年月が報われます。まさに個々が木の持つ力、価値、魅力を知り、木の「持ち味」と「木は面白い」を共有して「木への想いを熱く、熱く語り」頑張っていくましよう。

引用文献等

(1) 美郷町六郷：秋田諏訪宮ホームページ

<https://www.kensoudan.com/firu-naka-y/rokugou/suwa.html>

(2) やさしい丸太の見分け方：信州グリーンコンサルタント協会

(3) 高齢級人工林ヒノキのブランド化について：中部森林管理局森林技術交流発表会発表集

(4) ブランド材を用いた新たな洋風パーティションコンペ:中部森林管理局

(5) 木曽町役場：写真提供

(6) 上松町役場：写真提供

(7) 大桑村役場：写真提供